

四無量心

慈悲喜捨

信卷御引用の涅槃經に

「大慈大悲を名づけて仏性となす……大喜大捨を名づけて仏性となす。」とある。この大慈大悲大喜大捨を四無量心といわれる。仏性であるから、仏菩薩の御心である。したがって本願の内容もまた四無量心であろう。われらは特に涅槃經に「大慈大悲は常に菩薩に随うこと影の形に随うがごとし。一切衆生ついに定めてまさに大慈大悲を得べし。このゆえに説きて一切衆生悉有仏性といえるなり。」とある文を信樂釈の直後に引きたまひし聖人の御意を思うものである。他力の大信心は四無量心によつて成ずること、随つて大信心は仏性そのものであることを立証せんとせられるのであろう。涅槃經の大問題たる一切衆生悉有仏性論も、具体的には、他力本願の廻向の信心、それにより得る大涅槃の証によつてはじめて成就せられることを示されるのであろう。

仏性は大慈大悲大喜大捨の四無量心である。したがって仏心とは実に四無量心である。

大慈大悲

智度論二十七には、

「大慈ハ一切衆生ニ樂ヲ与へ、大悲ハ一切衆生ノ苦ヲ抜ク。大慈ハ喜樂ノ因縁ヲ以テ衆生ニ与へ、大悲ハ離苦ノ因縁ヲ以テ衆生ニ与フ。」

と説かれる。かくのごとく慈は与樂、悲は抜苦というのが普通の解釈であるが、時にはこの反対に与樂を悲、抜苦を慈といつてある場合もある。つまり慈悲とは抜苦与樂である。

辞書を見ると慈という文字は、「いつくしむ。柔和」という意であり、また「恩愛す。和げ服やわらわす」とある。つまりなまけ深いあたたかな心、あわれみはぐくむ心である。それはちよūd春の暖かさがすべての草木をして芽を出さしむるがごとく、一切衆生をつつみ抱いて育てて下さる温かい仏心そのものである。いかに正義であり真理であつても、このあたたかな柔かな心でないならば人の心を和げて悦服せしめることはできぬであろう。誠に大慈のゆえに、慈悲されるものの運命を慈悲する者の世界まで育て上げられるのである。

次に悲という文字は、「いたむ、かなしむ、あわれむ、恩をほどこす。」とあり、衆生のすがたに対して痛み悲しむ心である。親は不孝な子について悲痛し、如来は業苦流転の衆生に対して悲痛したまう心である。であるから大慈が衆生を高めようとする心であるに対して、大悲は衆生の低きに泣く心である。大悲は悲しき運命に同ずる心であり、大慈はそれを育てて共に幸福ならんとする心である。大慈は自らの運命の中に彼を発見する心であり、大悲は彼の運命の中に我を発見する心である。であるがゆえに智度論に「ソレ悲ト言フハ、意饒益ニ存シ、善ク物ノ情ニ順フ。」と言われるのであろう。彼の運命に随順しつつ、しかも饒益にようやくせんとするのである。饒

益せんとするは実は大慈であるから、悲には慈を、慈には悲を互いに含んでよく抜苦与樂するのである。

さらに先の論の「大慈は喜樂の因縁をもつて衆生に与え、大悲は離苦の因縁をもつて衆生に与う」と言われる言は味わわなくてはならない。喜樂の因縁、離苦の因縁を与えられるのが大慈悲である。苦悩にあり闇にあるのは因縁が悪いのである。因縁によらずしては喜樂を得ることも苦悩を離れることもできない。因縁に泣く子をして因縁を喜ばしむるには、具体的にはどうされることであろうか。それは誠に真実の教えを聞信することのできる因縁を与えられることであろう。真実教に遇うことなくしては真実の喜樂の因縁を得ることは不可能である。念仏は誠に如来の大慈悲による離苦の因縁であり、喜樂の因縁の成就である。

智度論卷二十には三縁の慈悲を結んで、

「譬へバ貧人ニ給賜スルニ、或ハ財物ヲ与へ、或ハ金銀宝物ヲ与へ、或ハ如意真珠ヲ与フルガ如シ。衆生縁法縁無縁亦復是ノ如シ。」と言われる。たとえば衆生縁の慈悲とは、貧しい人に財物を与えるがごとくである。今現に食に飢えている人にご飯を与え、寒さにふるえている人に衣服を与えるがごときものである。次に法縁の慈悲とは金銀宝物すなわちお金や宝を与えるようなものである。金銀宝物があれば何でも必要なものを買取ることができる。

しかるに第三の無縁の大慈悲は、これを如意真珠を与えるがごとしといわれる。如意宝珠は意のごとく何でも求めるものを出すことのできる宝珠である。財物は直ちに失われ、金銀宝物も尽きる時があるが、如意宝珠は限りなく財物でも金銀でも出して尽きることがない。如意宝珠とは実に、正法であり、大行であり、大信である。真実の教行信証すなわち往生即成仏の因果を与えられたことである。念仏は如意宝珠である。「無限なる喜樂の因縁」が成就されたのが念仏である。人はこの如意真珠を捨てて、金銀宝物に走り、さらに金銀宝物をすてて、直接に財物に手を出す。永久に貧苦なるゆえんである。よろしく如意宝珠たる大悲誓願廻向の念仏にさめねばならぬ。

大喜大捨

智度論卷二十にいわく、

「四無量心トハ慈悲喜捨ナリ。慈ハ愛念衆生ニ名ツク。常ニ安穩樂事ヲ求メ、以テ之ヲ饒益ス。悲ハ愍念衆生ニ名ツク。五道中種々ノ身苦心苦ヲ受ク。喜ハ衆生ヲシテ樂ニ從ヒ歡喜ヲ得令ント欲スルニ名ツク。捨ハ捨三種心ニ名ツク。但衆生ヲ念ジテ憎マズ愛セズ。」

大慈大悲について今ここには、大慈を愛念衆生、大悲を愍念衆生といわれるが、大体前に述べたごとくである。次に大喜を積して「喜は衆生をして樂に従い歡喜を得しむるに名づく」といわれる。これによれば喜とは、衆生の離苦得樂を見て喜びの心を起こすことである。すなわち他の幸福を見ておのれが喜びとする心であるから、大慈大悲と別なものではない。大慈大悲の行ぜられるところには必ずなくてはならぬ心である。この大喜は時に隨喜といわれる。他の善を見てこれを喜び、自己

が善を行ずると同じくこれを喜び敬うことのできる心である。この心を凡夫は持たないのである。他の幸福を見てはこれを嫉み、他の善を見てはこれを謗つて随喜しない。それゆえに無功德の悪人となるのである。

そこで大喜を成ぜんとすれば次に「捨」を成就しなくてはならない。「捨は捨三種心に名づく、ただ衆生を念じて憎まず愛せず」と説かれる。三種心を捨てるとは、慈無量心、悲無量心、喜無量心の三種の心を成じて、しかもこれを捨てて心に執着しないことである。慈悲して慈悲を忘れ、大喜して喜を忘れた心である。そこで「ただ衆生を念じて憎まず愛せず」といわれる。つまり愛憎の心を捨てたのが捨である。

これを思うに、大慈大悲は一切衆生を真に生かし育ててゆく心であり、大喜はこれを唯一の喜びとする親心であり、大捨はその成就せる物を所有しようとする愛着を捨てた心である。たとえば太陽はすべてを育てて花を咲かせつつ、これを折り取とうとはしないがごとくである。しかるに凡夫は物を愛し、愛するがゆえに憎む、誠に「愛憎違順することは高峯岳山にことならず」（正像末和讃）である。貪愛瞋憎の水火二河は、生まれおちてよりのち終わるまでついにこれを捨てることができぬのが凡夫である。「捨」がないから「喜」がなく、「喜」がなければ慈悲二心またない。であるから、この大慈大悲大喜大捨の四無量心は、一を真に成ずれば他の三心は必然に具足するのであり、もし一を欠けば他の三もまた無いのである。

されば智度論には、「もし慈を説かばすなわちすでに悲喜捨を説く。また次に慈はこれ真無量なり。慈は王のごとく余の三は随従すること人民のごとしとなす。ゆえんはいかん。まず慈心をもつて衆生をして樂を得しめんと欲するに、樂を得ざる者あるを見るがゆえに悲心を生ず。衆生をして苦心を離れ法樂を得しめんと欲するがゆえに喜心を生ず。三事の中において無憎無愛無貪無憂のゆえに捨心を生ず。」と説かれるゆえんである。

誠に四無量心はそのまま唯一の仏心そのものである。この四心によつて、無量の衆生を縁じて無量の福を引くがゆえに、四無量心といわれるのである。四無量心はわれら一切衆生には無い。無ければ無功德の悪人愚者である、必ずこれを得なければならぬ。今われらはこの涅槃経の四無量心の文を信巻信樂釈の教証として引きたまひし聖人の御意を思うことである。